

Title	実践学としての日本経済学
Author(s)	谷口, 吉彦
Citation	経済論叢 (1940), 51(1): 19-36
Issue Date	1940-07
URL	https://doi.org/10.14989/131406
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第卷一十五第

月七年五十和昭

論叢

民族主義と帝國主義……………文學博士 高田保馬
實踐學としての日本經濟學……………經濟學博士 谷口吉彦

時論

日本國と蘭領東印度……………法學博士 末廣重雄

研究

江戸時代の國產獎勵……………經濟學士 堀江保藏
理想型理論の方法的意識……………經濟學士 出口勇藏
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

說苑

北支滿洲損害保險市場……………經濟學士 佐波宣平
ハンセンの人口政策に就いて……………經濟學士 青盛和雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

實踐學としての日本經濟學

谷 口 吉 彦

目次

一	理論と實踐との統一	二	存在的實踐と當爲的實踐	三	日本經濟の理論と實踐
四	綜合體系としての實踐學	五	實踐學と技術學		

一 理論と實踐との統一

新たに建設さるべき日本經濟學は、理論的研究と政策的研究と歴史的研究との綜合としての實踐學でなければならぬことは、すでに早くより吾々の主張する所である。而してその理論的研究が如何にして成立しうるか、またその政策的研究が如何にして成立しうるかに就ては、さきに一應の理論的検討をなしたる所であるから、本論においては此の兩論を承けついで、實踐學としての日本經濟學が如何にして成立しうるかにつき考察しようと思ふ。

さて經濟學における理論と實踐との統一は從來の經濟學に對する一つの批判として、また新たな經濟學に對する一つの要求として、すでに早くから主張され來つたものである。¹⁾それは從來の經濟學が餘りにも實踐を無視した抽象的觀念論に終始する傾向に對して、批判または反省の意味を有すると同時に、また從來の經濟的實踐が、

實踐學としての日本經濟學

第五十一卷

一九

第一號

一九

1) 拙稿『理論學としての日本經濟學』(本誌第四十八卷第一號昭和十四年一月)
2) 拙稿『政策學としての日本經濟學』(本誌第四十九卷第一號昭和十四年七月)
3) 拙稿『經營理論と經營實踐』(『經營經濟研究』第十三册、昭和七年二月)

國家としても個人としても、餘りに非學問的な主觀的恣意に出づるものが多いからであつた。この二つの方面から、従來は理論は理論として進み、實踐は實踐として進み、兩者の間には何等の連繫もなくして今日まで來てゐる。この誤れる傾向に對して、理論と實踐との統一を強調することは、まさに今日の經濟學に對する有力な警鐘に相違ないことは、何人も之を否定しないであらう。併しながらその意味は、通俗的な經濟學の實際化または應用化といふものでもなく、また實際的經營の學問化または科學的經營の強調といふが如きものでもない。問題はもつと根本的な深い所にある。それは理論的研究または學問の研究における出發と過程と結果とに關聯する。⁴⁾

まづ第一に、理論的研究の出發點において、すでに理論と實踐との統一がなければならぬ。謂はゆるアカデミツクの研究として、眞理のために眞理を研究し、研究のために研究するといふ従來の態度は清算されて、實踐のために眞理を研究し、現實のために理論を研究するといふ一種のプラグマチズムに轉換する。併し之は眞理を實用性に求めんとする謂はゆるプラグマチズムではない。たゞ實踐的意義のために眞理を求めんとする點において古き意味でのアカデミツクを超越して、研究の出發を變革せんとする實踐的主張である。

第二に、理論的研究を進める過程においてもまた、理論と實踐とは統一されねばならぬ。従來の如く理論はたゞ理論として、専ら形式論理の推理によつて進められ、實踐はたゞ實踐として恣意的に遂行せられる傾向は清算されて、理論の追及を單なる頭腦の論理にのみ頼らず、常に現實の實踐を顧みつつ、之を資材として利用すると共に、實踐の遂行を單なる經驗または主觀にのみよらず、常に理論的指導に導かれつつ實踐するでなければならぬと考へる。

第三に、理論的研究の結果においてもまた、理論と實踐とは統一されねばならぬ。従來の如く、理論としての眞理と實踐としての効果とは全く別のものであり、理論的に正しきこと必ずしも實踐的に正しからずとする見解は清算されて、理論の正否は單なる形式論理によらず、實踐の結果によつて判定せられ、また實踐の正否は單なる功利のみならず、その理論的根據をも顧慮さるべく、正しき理論的結論は正しき實踐的效果を要求せねばならぬと考へる。

かくの如く正しき理論的研究は、その出發においても過程においても結果においても、理論と實踐との統一を有たねばならないと言ふ主張は、今日では決して單なる個人的な希望または主觀的な獨斷ではなくして、必然的な社會的根據を有する客觀的要求である。即ち資本主義の順調な發展をつゞけつゝあつた時代には、經濟に關する理論的研究は、たゞ理論のための理論または研究のための研究として、現實の實踐との間には何等の關聯もなく、全く之と遊離して行はれることは可能であるのみならず、それにて何等の差支もなかつたものである。即ち之を國家の實踐より見れば、政治と經濟とは殆んど全く遊離して、經濟は經濟自身の法則に従つて自律的に進み政治は政治として之と獨立に進んで、何等の差支なく國家生活をつゞけることが出來た。また之を個人の實踐より見ても、その經營は全く自由に從來の經驗に基づいて、之を運營して何等の差支もなかつたものである。かくの如き場合には、理論の研究は現實の實踐と遊離するのは寧ろ當然であつて、之は必ずしも學者の個人的責任または怠慢の結果と考ふべきではない。

然るに資本主義の自由經濟が全く行き詰つた今日の段階においては、國家的には統制經濟の名において、政治

と經濟とは全く癒着して一體となり、國家の經濟的實踐は國家活動の重要部分を占めることゝなつた。また個人的にはその經營の實踐は國家の規制を免れず、從來の經驗のみによつて實踐を指導することは不可能となつた。かくの如き社會的根據において、理論と實踐との統一が強く要求されるのは、まことに當然であると言はねばならぬ。

然るに現實においては、この要求は容易に實踐され得ない。これは理論の保守性と實踐の進歩性といふ矛盾から來る結果であらう。理論や研究は現實の實踐的事實を資材として成立するものであるから、現實の事實の發展に比すれば、常に時間的の遅れを免れない。ことに今日の如き眼まぐるしき現實の變革されつゝある時代には、理論は、著しく現實から取り殘されて、謂はゆる古き理論と新らしき事實との對照が、最も顯著に曝露されて來る。經濟學の權威の失墜が一部に唱へられるのは、主として此の事情から來るものであつて、かくの如き狀態では、理論はたゞ理論自身としても、即ち現實の單なる説明としても、全くその意義を失ふの外ない。況んや現實の實踐を指導すべき實踐學の成立の如きは、殆んど之を期待することは出來ないであらう。實踐學としての經濟學の成立しうるためには、何よりも先づ先きに述ぶるが如き意味における理論と實踐との統一が前提的に必要であると考へられるのは此の故である。

二 存在的實踐と當爲的實踐

理論は實踐に出發し實踐に歸着する。併しながら理論の出發點としての實踐と、理論の歸着點としての實踐と

は、等しく實踐ではあつても、全く異なる意味での實踐である。理論に先だつて實踐あり、科學に先だつて事實ありといふ場合の實踐または事實は、現實の事實として既に存在し、または既に繼續しつゝある實踐であつて、言はず存在の實踐または事實である。最初にこれ無くしては、如何なる理論も、學問も存在し得なかつたであらう。例へばナイル河の洪水なくしては、ユークリッド幾何學はおこり得ず、十指の經驗なくしては、十進法數學は成立し得ないと考へられるのは此の故である。

この種の實踐は理論に先だつて存在し、理論の研究に資料を提供して、之を出發せしめるものであるから、理論の研究に對して必要な條件となるものではあるが、併し之に對して必ずしも十分な條件となるものではない。即ち現實に研究を出發せしむるものは、決して現實の實踐または事實そのものではなくして、寧ろ之に對する不満からである。日常の實踐または現實の事實が、全く満足しうる完全な状態にあるならば、そこからは決して研究は出發し得ないであらう。現實の不完全または之に對する不満より來る所のより、よき實踐またはより満足すべき事實に對する欲求こそ、現實に研究を出發せしむる動機となるものである。言はず意欲としての實踐であり消極的の意味における當爲的實踐または事實である。

併しながら理論に先だつ實踐と言へども、決して偶然的または恣意的の實踐ではあり得ない。そこには何等かの客觀性をもつた指導原理的なるものがあつて、之に導かれて現實の實踐をなしつゝあつた。吾々はこれを經驗といふ。經驗は元來は個人的主觀的なるものではあるが、併し積み重ねられた經驗は或程度に社會的な客觀性をもつて來て、よく實踐を指導しうることとなる。それ故にこの場合における實踐に對する不満または不完全と

は、實は、その實踐を指導しつゝある經驗の無能力または不完全であり、經驗の指導力に對する不滿に外ならない。こゝから理論の研究が出發する。従つて理論と經驗とは、實踐に對する關係において全く對立し、不満足なる經驗による實踐の指導に取つて代らんとする所に、理論の研究が出發するわけである。

然らば經驗の指導力は何故に無能力となるか、何故に之に代らんとする理論を要求するに至るか、それは言ふまでもなく現實の實踐または事實の發展の結果である。現實の實踐は經驗に導かれつゝ實踐されるものではあるが、併しその發展の過程においては、逆にその經驗をもつては導かれ得ないものに發展する。ことに現實の實踐は、常により、大なる客觀的社會の中において行はれるから、例へば個人の實踐は國家または社會の中において行はれ、國家の實踐は國際または世界の中において行はれるものであるから、この客觀的なより、大なる社會の發展するに従つて、その中における個人的または國家的の實踐は、從來の經驗による指導をもつては、行はれ得ないこととなる。この客觀的な社會的變化に適應して、誤りなき實踐を續けて行くためには、もはや從來の經驗は全く無力となり、之に代つてその實踐を指導すべき何ものかを要求するに至るは必然である。この必要の結果として理論の研究が生れて來るわけである。

かくして理論の研究はすでに、その出發點において、現實の實踐または事實を素材とするのみならず、更に、より、よき實踐に對する要求と結びついてゐる。たゞこの要求されたるより、よき實踐は、極めて漠然たる不特定の當爲的實踐にすぎず、單に何等か現在より、以上のものを欲求するといふ程度にすぎない。かりに之を消極的の當爲的實踐と言へば言ひうるであらう。

之に對して理論の歸着點としての實踐は、その出發點としての實踐とは全く異なる實踐でなければならぬ。言ふまでもなくそれは現實の事實としてすでに存在し、または既に實踐されつゝある事實ではあり得ない。かゝる存在の實踐に對して、これは將來において當然に實踐さるべきものまたは實現さるべき事實であるから、正しく當爲的實踐と言ふことが出来る。これは前述の消極的な當爲的實踐ではなく、積極的な當爲すなはち特定された一定の實踐である。それは學問的研究の結論として到達したる結果であり、將來の實踐に對する指導原理によつて導かれて實現さるべき實踐である。理論または學問研究の究極の目的は、かゝる實踐を現實に實現せしめんとするに外ならず、研究に伴ふ種々の手續や過程は、これに到達する一つの手段にすぎないと考へられる。

たゞ併しかくの如き理論的研究に對する實踐的要求または學問研究の究極目的としての當爲的實踐の如きは、必ずしも個々の研究家の個人的意圖に關するものではない。個々の研究家の意圖は、常に必ずしも現實の實踐的意圖に出づるものとは限らず、寧ろ多くの場合には、かくの如き實踐的要求から離れて、理論のために理論を研究し、研究のために研究を進めて、決して差支ないのみならず、寧ろかくの如きが却つて學究的態度として學界の賞讃を博するほどである。それ故にこゝに言ふ實踐的要求とは、かゝる學者の個人的意圖とは別に、一つの社會的要求または國家的要求として、社會的根據において要求せられるものである。今もしかゝる實踐的要求をもつて、全く個人的または主觀的のものと考えらるれば、その要求は各人によつてそれ〴〵に相違するのみならず、時には全く兩立し得ざる諸要求より出發することもあり得べく、その間に一般的な客觀性を認めることは出來ないであらう。かくして個人的なる研究の動機は種々に相違しうるに拘らず、われわれは學問研究の出發點と

しての實踐的要求は個人的意圖の如何に關せず、一定の客觀的な社會的規定を受けるものと考へる。

併しながらこのことは、決して一定の研究者が、右の社會的要求を反省し自覺して、之をその個人的意圖として出發しうることを否定するものではない。寧ろ優れたる研究者は、この社會的要求をもつて自らの個人的意圖として、その研究を出發せしむるものであり、こゝに至つて彼れの研究は、個人性を脱却して社會性を帯びて來る。現實の研究は個人によつて行はれてはゐるが、併しその個人はもはや單なる個人ではなく、社會的要求の擔當者として現はれて來る。こゝに研究主體の問題がある。研究主體は現實には個人ではあるが、併し彼れは個人の主觀的な恣意によつて、研究を進めるのではなく、社會または國家の意識と要求において、之を行ふものである。かくしてこそ彼れの研究は、私のものから公のものに轉化しうるわけである。

三 日本經濟の理論と實踐

理論と實踐との關係についての一般的な右の考察は、そのまゝ之を日本經濟學にも適用することが出来る。何よりもまづ第一に、日本經濟學は日本の經濟的實踐または事實を資材とし、之を研究對象として出發する。この實踐は日本における日本人の實踐であり、また日本國家の實踐であつて、日本經濟の理論に先だつて存在し、そこから理論を出發せしむるものである。個人的にせよ、國家的にせよ、そこには恐らく日本獨特の實踐が存するであらうと考へられる。そこで之を資材としてそこから出發する日本經濟學は、たゞこの點を考へた丈けでも、すでに何等かの特殊性があり、獨特の理論が成立しうるであらうと考へられる。蓋しこの種の實踐といへども、

全く主觀的または恣意的に行はるゝものではなく、日本における日本的の經驗に導かれて、何等かの客觀性をもつた指導原理的なるものに導かれて、日本の經濟を實踐しつゝ來たからである。

併しながら日本經濟學の研究を出發せしむるためには、かくの如き單なる事實としての日本經濟の實踐だけでは足らず、個人的にも國家的にも、その實踐に對する不滿がなければならぬ。現實の實踐が不完全であればあるほど、また實踐に對する不滿の大なれば大なるほど、よりよき實踐に對する要求はますます熾烈となり、従つて日本經濟學の研究に對する刺激は、ますます強烈とならざるを得ない。

むしろ最近における日本經濟學研究の勃興は、廣く一般的なる日本的反省の結果であり、その精神的影響の結果でもあるが、併し他方にはまた、現實の實踐の行詰りに由來する點も少くないと考へられる。永き發展の歴史を有する自由經濟の時代には、たゞ従來の經驗に導かれるだけで、何等の不安も不滿もなく、安定期の經濟を實踐することが出來た。これは個人においても國家においても全く同様である。然るに最近の變革期におけるが如く、自由經濟は全く行き詰つて、之に代つて統制經濟の強化せられる時代に及んでは、その國家的または個人的實踐は、もはや従來の經驗をもつては、何ごともし得られないこととなる。そこでこの變革期における實踐とともに國家的變革的實踐を指導しうる理論の必要は、今日において、最も緊迫した國家的要求となつてゐる。そして斯くの如き緊迫した國家的または社會的要求の存する場合には、個々の研究者もまた必然に之に動かされて、その客觀的な國家的要求をもつて、自らの個人的または主觀的な動機として採り入れざるを得ない。今日とははや、何人といへども、全く個人的な動機から、獨善的な研究に没頭しうるほどに、有閑な時代ではなくなつてゐる。

る。

今日の如き日本經濟の變革期においては、その指導力を全く失つて無力化したものは、たゞに從來の經驗に限らない。謂はゆる一般經濟學または西洋經濟學における理論もまた、實踐に對する指導力を失ひ、理論の無力化を招來してゐる點においては、古き經驗と多く異なるものではない。理論はもと經驗の無力化を救ふために生れたものではあるが、今日ではその理論そのものがまた殆んど無力化せんとしてゐる。むしろ理論の無力性は、必ずしもその誤謬性を意味するものではない。理論は理論そのものとしては、何らの非論理性もなく、また何ら形式論理の飛躍を含んでゐるわけではない。理論は理論として正しいとしても、それはたゞそれだけのことであつて、何ら實踐との關聯もなく、況んや實踐を指導しうる何らの力をも有しない。この意味において理論の無力を曝露すること今日の如く甚だしきはない。

これは一つは、最初に論ずる理論と實踐との統一の缺如から來たものであり、一つは一般經濟學または西洋經濟學から來たものであると考へられる。前の點では、それは廣く經濟學の一般的の課題であり、謂はゆる西洋經濟學もまた此の點について一般的な憚みを免れうるものではない。然るに後の點において、それは日本經濟學への要求とならざるを得ない。たとひ經濟學における理論と實踐とが統一せられて、その實踐的要求が充たされたとしても、それが一般經濟學または西洋經濟學にとゞまる限りでは、それは依然として指導力を有たず、その實踐性には一定の限界を免れない。それが一般經濟學である限りは、その實踐性も一般的ならざるを得ず、またそれが西洋經濟學である限りは、日本の實踐を指導しうる筈はない。もとゞ現實の實踐は、最も特殊具體的なも

のであるから、一般抽象的な理論體系では、眞の實踐性を有つことは出来ない。經濟學が實踐的であればあるほど、ますます國民的性格を強めねばならぬ。こゝに日本經濟學への要望が必然的となる根據があつた。

かくして成立すべき日本經濟學は、必然的に實踐的なるものでなければならず、また經濟學が實踐的となるために、それは日本經濟學として成立せねばならぬ。勿論こゝで實踐的と言ふ意味は、決して理論的であることを否定するものではない。否むしろ今日の狀勢では、われは寧ろ非理論的または無理論的な日本經濟論の横行を憂ふるものである。そこで問題は、日本經濟學における理論と實踐との統一は、いかにして可能であるかといふ點に歸着する。

四 綜合體系としての實踐學

新たに成立する日本經濟學は、實踐學としての性格を有すべき點において、從來の經濟學とはその性質を異にするべきものと考へる。むしろそれは日本的といふ點においても、その日本的なるものゝ内容如何に拘らず、その特質を有すべきこと言ふまでもない。併し假りにそれが日本的であると否とに拘らず、實踐的であるといふ點だけでも、すでに新たな經濟學として成立しうるだけの十分の意義を有するものと考へる。吾々は日本經濟學の特質を、主として右の二つの點に求めんとするものであるが、そのうち日本的なるものゝ内容については姑らく別の問題として留保し、こゝには主としてその實踐的なる特質について考察するものである。

さて實踐的なることは理論的なることと矛盾しないのみならず、吾々の考へでは、眞に實踐的なるためには、

何よりも先づ理論的でないければならぬ。それは最初に論ずる如く、元來その理論的研究なるものは、現實の實踐的要求から出發してゐることによつて明らかである。そればかりではない。實踐的なるものは、たゞに理論的研究を前提とするのみならず、更に歴史的研究をも前提とする。日本經濟の實踐を指導しうるためには、現實の日本經濟の事實の中に流れる法則を把握すると同時に、過去の日本經濟に關する歴史的研究をなすでなければ十分ではない。蓋し歴史は現實の實踐の時間的集積に外ならぬからである。ことに日本經濟學における他の特質をなす日本的なるものは、主として此の歴史的研究の結果として、闡明さるべきものではないかと思はれる。

併しながら歴史的研究を前提とする理論的研究でも、それが直ちに實踐と結びつくわけではない。理論と實踐との統一を媒介する要素として、その間に政策的研究の介入することを要する。理論的研究と政策的研究との關係については、すでに前論において検討した所であるが、それが法則學である點においては兩者は相等的い。たゞその法則の性質は全く異り、一は事實の存在を説明する存在法則または説明法則であり、他は事實の當爲を規範する當爲法則または規範法則である。従つて一は現實の事實の探求によつて之を發見することは出来るが、他は事實または事實の間に行はるゝ法則に價值判斷を加へて、そこから新たな當爲法則を設定せねばならぬ。かくして事實または實踐のあるべき状態を規定する政策的研究は、理論的研究を前提として成立すると同時に、新たな將來の實踐を規定することによつて、理論と實踐とを媒介し、存在的實踐と當爲的實踐とを媒介するの機能を有するわけである。

歴史的研究と理論的研究と政策的研究とは、かゝる意味において互に關聯して一貫せる脈絡を有しつゝ同時に

是等のすべては総合せられて、最後の實踐に歸着する。即ち歴史學と理論學と政策學とは、實踐學によつて総合さるべき關係にある。こゝに総合とは、それ／＼の部分を包攝しつゝ而かもそれよりも高次の地位において、すべてを吸収し包含する關係を意味する。歴史學も理論學も政策學も、一應はそれ／＼に獨立した研究部門であり、それ自身において一つの獨立した學問として成立しうるものではあるが、併し三者はまた決して孤立して成立するのではなく、相互に必然の關聯において、より高次の實踐學に包攝せられ吸収される。この關係は恰かも吾々がすでに他の機會に論じたる綜合主義の原理¹⁾におけると全く同様であると考へられる。この意味においてすべての研究は、實踐に出發し實踐に歸着するといふことが出来る。

日本經濟學においてもこの關係は全く同様であつて、その総合せられ歸着せらるゝ所は、結局において日本經濟の實踐を指導すべき實踐學である。然るに日本經濟の實踐には、全く異なる意味における二つの實踐が包含される。一は個人的實踐、他は國家的實踐これである。

個人的實踐とは國家または國民經濟の内部における各個人の經營的實踐を意味する。この種の實踐を指導する學問は、従來は經營學または經營經濟學と稱せられ、廣義の經濟學における特殊部門をなしてゐた。むろん今日といへども、この種の經營學が存立しないわけではない。併しながら吾々がこゝに問題とする日本經濟學における實踐性の問題は、かくの如き經營學における個人的實踐とはその意味を異にする。理論的研究については姑く別として、政策的研究ことに實踐學としての綜合體系においては、經營學にあつては、その個別經營の立場において、その個人の利益のためにする實踐の指導に外ならぬ。然るに日本經濟學における實踐の指導は、たとひ

1) 拙著、東亞綜合體の原理。

その對象は等しく個人的實踐ではあつても、國家經濟の立場において、國家または國民全體の利益のために、之を指導することとなる。前者はその個人の利益のために、いかに實踐すべきかゞ問題であり、後者は國家の利益のために、その個人をして如何に實踐せしむべきかゞ問題となる。従つて兩者は全く異りうるのみならず、時には全く矛盾し、屢々對立することさへあり得るのは、最近の吾國における統制經濟の進展に關聯して、周知の事實となつて現はれて來た。

統制經濟の行き詰りに直面して、經濟の倫理化運動の強調されて來たのは、主として右の個人的實踐の國家的指導を意味するものである。或は國家的奉仕といひ、或は國策順應といふのも、ほど同じ意味である。たゞ今日では是等の新たな運動も、甚だ偶然的であり主觀的であつて、そこには何等の必然性も客觀性も發見されず、況んや何らの體系も原理も存在しない。實踐的な日本經濟學の強く要求される一つの理由は、此の點からも來るものと思はれる。

また新たに試みられつゝある日本經濟學の中には、専らこの種の個人的實踐の指導ばかりを問題とするものも少くない。例へば報徳主義の原理の上に日本經濟學を打ち建てんとし、または應分經濟學をもつて之を建設せんとするが如き、何れも確かに傾聴に値する新説ではあるが、併し是等は何れも個人的經營の實踐を、國家的または倫理的に律せんとするに過ぎず、むろん之も日本經濟學の重要な一つの任務には相違ないが、併しそこには尙一つの重要な國家的實踐の指導といふ任務の存することを忘れてはならない。

五 實踐學と技術學

日本經濟學の實踐的要求には、個人的實踐と並んで重要な國家的實踐がある。國家は個人と並んで種々の經濟的經營をなすところあるから、國家的實踐のうちには、むしろ此の種の實踐指導も含まれてはゐるが、併しこゝで國家的實踐としてより、重要な問題となるのは、かくの如き國家の私經營的實踐ではなく、寧ろ國家が全體としての國民經濟または國家經濟を如何にして運營してゆくかの實踐である。

謂はゆる自由放任經濟の時代にあつては、この種の國家的實踐の理想は、之を最小限度に制限するにあつた。財政と社會事業とを除いては、すべて之を國民の個人的實踐ことにその營利的經營的實踐に一任し、之に對しては何ら國家的の指導または規律を行はないのが理想であつた。併しこの場合でも、その自由放任政策をもつて國家の理想とし主義とした場合には、消極的な意味においては、之をもつて一種の國家的實踐を見ることも出来る。即ち國家は自由放任政策を實踐しつゝあつたと言へる。

然るに之に對する反對の極端にあつては、經濟の國家的實踐を最大限度に擴張し、個人的實踐を最小限度に縮小して、すべての經營的實踐を國家において引受けんとするに至る。前の極端なる個人的實踐主義に對立する反對物として、之はまた極端なる國家的實踐主義である。謂はゆる共產主義の國家的實踐は即ち之に外ならぬ。

之に反して今日の如き國家統制經濟の時代にあつては、その國家統制を運營するといふ國家の實踐は、右の二つの場合におけるとは全く異なる意味を有つてゐる。即ちこの場合には、前の個人的實踐と後の國家的實踐とを

止揚し綜合したる新たな國家的實踐が生れることとなる。むろん茲でも個人的經營は存續するから、固有の個人的實踐は殘存する。この點において前述の共產主義國家の場合と異なる。併しこの個人的實踐を個人の自由に放任することなく、之に對して國家的統制を加へる點においては、前述の自由主義國家の場合とも異つてゐる。何れにせよ今日の段階は、從來の自由國家とその反動として現はれた共產國家との止揚段階であり、従つてその國家的實踐には、必然に二重の意味を有つて來る。第一は前述の如く、個人的實踐の國家的指導といふ意味において、むろんその經營實踐の主體は個人ではあるけれども、その指導または統制の主體は國家であるから、この後の半面において、そこには國家的實踐も含まれてゐる。第二は、全體としての國家生活の經營主體としての國家が、その政策を實踐する場合であつて、本來の意味における國家的實踐とは即ち之に外ならぬ。

國家がその經濟生活を擴充する爲の政策を實踐することゝ、國民個々の經濟生活を向上せしむることゝは、むろん密接な關聯はあるが、併し全く別々の事柄である。例へば國家が生産力擴充計畫を立て、之を實現せしむるためには、むろん國民各個の生産力を擴充せしめねばならぬが、併しそれとは別に國家全體の生産力擴充政策を實踐するものは國家であつて個人ではない。或はまた個々の商品の賣買價格は個人的實踐によつて實現されるが、一般商品の物價水準を低下せしめるが如きは、國家の物價對策の實踐の結果として實現される。要するに日本の經濟政策の實現は、日本の國家的實踐の結果としてのみ之を期待することが出来る。

最後に政策學と實踐との間にはなほ一つの媒介を必要とする。政策學または政策的研究は實踐を指導すると言つても、それはたゞ法則的に實踐に對する一般的指導をなすに止まり、個々の一つ一つの具體的實踐を指導し

て、その結果を實現せしむることは之によつては出來ないことである。個々の具體的實踐をなすためには、政策學と實踐との間に、さらに技術學の介入を必要とする。自然科学的の實踐ならば尙更のこと、國家科學的の實踐にあつても、現實に何ごとかを實踐するに當つては、必ずや多かれ少なかれ技術を必要とする。政策的研究は如何に實踐的とは言つても、所詮は規範法則の域を出でず、法則である限りは何等かの一般性がなければならぬ。然るに實踐は如何なる場合にも特殊的であり具體的である。吾々は一般を實踐することは出來ない。之に反して技術は實踐によつて習得せられ、實踐は技術によつて實現される。吾々は最も素朴的な實踐においては、理論も政策もない實踐を考へることは出來るが、併し多少にしろ技術のない實踐を考へることは出來ない。

政策は研究によつて規定されるが、技術は實踐によつて習得され、研究によるよりも寧ろ習熟によつて獲得される。それ故に苟も實踐を問題とする限り、たとひ經濟的實踐とは言へ技術の問題を看過することは出來ない。

技術は一定の法則を實踐に適用して、實踐の結果を實現せしむる能力である。實踐の成否を直接に決定するのは、主としてこの技術の巧拙によるものである。技術の能力または巧拙は、實踐の習熟によるものではあるが、併し必ずしも之に比例するものではなく、時には天才的能力が技術にとり重要な役割を演ずることもある。併しこの場合でも、後天的習熟は決して天賦の能力を殺ぐものではない。従つてまた技術に關する研究または技術學の如きも成立しうる。ことに自然科学におけるが如く、技術の高度化と複雑化の加はるに従つて、技術に關する研究や理論の成立する必要と可能を増して來る。併しながら技術と技術學とは別ものであり、技術は決して理論の研究によつて獲得されるものではなく、技術學はたゞ技術の習得に對する手段であり手引であるに過ぎない。

かくして技術は先天的の能力と後天的の習熟と技術的知識とによつて、獨立に成立せる能力であつて、これなくしては如何に詳細なる規定をなした政策學でも、そのみでは決して實踐的要求を實現せしめうるものではない。併しながら反對にまた、技術そのものも、これが適用を規定する政策なくしては、徒らに無用の長物たるに止まり、之を適用し活用する途がない。技術をして技術たらしめ、それによる實踐の効果を實現せしむるためには、政策の規定による技術の利用がなければならぬ。即ち政策と技術との關係は、恰かも理論と政策との關係と同じく、一を前提として他を後續せしめる。即ち政策は技術を媒介として實踐となり、技術は政策の指定に従つて實踐に適用される。かくして實踐→歴史→理論→政策→技術→實踐といふ一連の實踐的學問の體系が成立する。實踐に出發して實踐に歸着するとは即ちこの意味であり、また實踐によつて綜合されたる學問體系の成立とは即ち之に外ならぬ。これはもはや西洋式の謂はゆる科學ではない。狹義の科學もその中に含まれてはゐるが、もはや科學以上のものである。また東洋式の知行合一もその中に含まれてはゐるが、併し科學を無視したアジア思想に復古するものではない。新たに成立すべき日本經濟學は、かくの如き意味における實踐學的體系を有するものでなければならぬと思はれる。